大学の今がわかる情報誌

IKUEI NEWS

2008.10
vol.44

電通育英会

明日への視点

大学生の教育とキャリア形成の在り方を探る

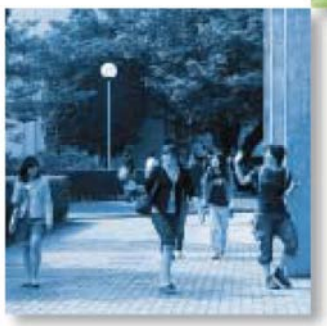
大学生研究フォーラム2008

大学を訪ねて

武蔵野美術大学

連載

〈時代はくりかえ史〉加来　耕三



明日への視点

大学生の教育とキャリア形成の在り方を探る 大学生研究フォーラム2008

IKUEI NEWS vol.44

目 次

明日への視点
大学生の教育とキャリア形成の在り方を探る
大学生研究フォーラム 2008

◆開催スケジュール…… 3
◆開会のあいさつ／登壇者のプロフィール…… 5
◆基調講演
これからの大学教育が育てるべき人間像…… 7
兵庫教育大学 学長　梶田 叡一
◆講演会
キャリア意識と大学教育…… 9
東京大学 大学院教育学 研究科長 教育学部長　金子 元久
アメリカでのキャリア発達研究の理論的展開
ーなぜ進路指導からキャリア支援なのかー……11
筑波大学 特任教授 キャリア支援室長　渡邊 三枝子
青年期論から見た大学生の成長 ー何が課題かー……13
大阪教育大学 教育学部 教授　白井 利明
教科と連携をとって推進される総合的なキャリア教育を目指して……15
広島県立呉三津田高等学校 教諭　牧野 亮
◆パネルディスカッション第1部ダイジェスト……17
「大学生のキャリア意識調査2007から示唆される現代大学生像」
司　会　京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授　溝上 慎一
パネラー　福島大学 人間発達文化学類 准教授　中間 玲子
上智大学 総合人間科学部 教授　武内 清
労働政策研究・研修機構 副主任研究員　下村 英雄
東京学芸大学 教育学部 准教授　浅野 智彦
◆パネルディスカッション第2部ダイジェスト……21
「現代大学生像から見えてくるキャリア教育への示唆」
司　会　労働政策研究・研修機構 副主任研究員　下村 英雄
パネラー　関西大学 社会学部 教授 キャリアデザイン担当主事　川崎 友嗣
龍谷大学 教学部長 経済学部 教授　河村 能夫
京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授　松下 佳代
広島県立祇園北高等学校 教諭　久保 玲士
◆「大学生のキャリア意識調査2007」とは……25
連載・時代はくりかえ史〈第29回〉……27
「無責任な為政者はいつの世も・・・・・・」 加来 耕三
大学を訪ねて〈第17回〉「武蔵野美術大学」……29
「大学院奨学生 夏期セミナー」を開催……33
IKUEI INFORMATION……37

８月２日、京都大学百周年時計台記念館にて
「大学生研究フォーラム２００８」が開催されました。
このフォーラムを共催したのは、
高等教育における教授学習や
ファカルティディベロップメントの実践的研究組織である
京都大学高等教育研究開発推進センターと、
大学生・大学院生への奨学金制度で
社会に貢献する有用な人材育成を目指す電通育英会。
両者が本フォーラムで目指したのは、
現代の大学生の姿を正確に理解すること、そして
現代社会を力強く生きていける学生を育てるための
大学教育のあり方を包括的に検討することでした。

今号は、非常に密度の濃い一日となった
「大学生研究フォーラム２００８」の大特集です。
キャリア教育の研究者が一堂に会した
真夏の京都の熱気をお届けします。

大学生研究フォーラム2008

2008年8月2日(土)
京都大学百周年時計台記念館（京都大学 吉田キャンパス）

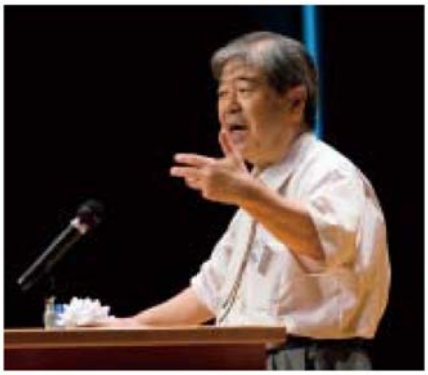
9:10〜9:45 受付

フォーラム全体の司会は
京都大学
高等教育研究開発推進センター
大塚雄作教授

9:45〜10:15 開会

京都大学
高等教育研究開発推進センター
溝上慎一准教授による趣旨説明

10:15〜11:30
基調講演
（7ページ）



12:30〜14:30
パネルディスカッション第1部
（17ページ）

14:45～16:00
講演会
(9ページ)

16:15～18:15
パネルディスカッション第2部
(21ページ)

18:45～20:30
情報交換会

開会のあいさつ

京都大学高等教育研究開発推進センター
センター長
田中　毎実

大学生研究とは、大学生は今どうあるのか、あるいはどうあろうと思っているのか、ということを調査・研究していくものです。またその背後には、大学生たちをどのような方向に導くか、という教育やFDの問題がある、という構造になっています。

昨年、私どものセンターでは、電通育英会と共同で「大学生のキャリア意識調査2007」という大規模かつ内容的にも目新しい調査を行いました。本フォーラムでは、その分析結果も出てくることになります。本調査および本フォーラム開催にあたっては、電通育英会に多大なご協力をいただき、心より感謝しております。

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、長年FDを主題として様々な研究活動を行ってきました。FDとは大学教員のあり方を考えることです。そして、それと向かい合う形で、学生のあり方を考えるという問題があります。

その意味で、本フォーラムで発表される研究が与えてくれるであろう新しい示唆を非常に楽しみにしております。皆様にとりましても、本フォーラムが実りのあるものとなることをお祈りして、あいさつとさせていただきます。

プロフィール

下村　英雄（しもむら　ひでお）氏
独立行政法人労働政策研究・研修機構
キャリアガイダンス部門・副主任研究員
1997年より現職。専門は職業心理学、教育心理学、社会心理学。博士（心理学）。主にキャリア発達とキャリア教育・キャリアガイダンスのあり方に関する研究を行う。主な著作に『キャリア教育の系譜と展開―教育再生のためのグランドレビュー』（共著、雇用問題研究会）、『キャリア教育への招待』（共著、東洋館出版社）など。

浅野　智彦（あさの　ともひこ）氏
東京学芸大学教育学部・准教授
1964年仙台市生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。1994年より東京学芸大学教員。若者の友人関係とアイデンティティ形成について研究。主な著書に『自己への物語論的接近』（勁草書房）、『検証・若者の変貌』（編著、勁草書房）など。

金子　元久（かねこ　もとひさ）氏
東京大学大学院教育学・研究科長 教育学部長
1950年生まれ。1972年東京大学卒業、1984年シカゴ大学大学院修了、Ph.D。広島大学助教授を経て、1998年東京大学教授、現在は東京大学教育学部長・大学院教育学研究科長。研究テーマは高等教育論、大学教育改革、教育の経済学等。主な著書『大学の教育力―何を教え、学ぶか』（ちくま新書）、『教育・経済・社会』（放送大学教材）、『近未来の大学像』（編著、玉川大学出版部）など。

梶田　叡一（かじた　えいいち）氏
兵庫教育大学・学長
1941年島根県生まれ。1964年京都大学文学部卒。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授などを経て、2004年12月より現職。文学博士。中央教育審議会委員〔文部科学省〕、言語力育成協力者会議座長〔文部科学省〕など。主な著書に『自己意識の心理学』、『子どもの自己概念と教育』（以上、東京大学出版会）、『教育評価』、『新しい大学教育を創る』（以上、有斐閣）など。

溝上　慎一（みぞかみ　しんいち）氏
京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授
1970年生まれ。1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手・講師を経て、2003年より現職。主な著書に『現代大学生論』（NHKブックス）、『大学生の学び・入門―大学での勉強は役に立つ!』（有斐閣アルマ）、『大学生の自己と生き方』（ナカニシヤ出版）、『対話的自己』（翻訳書、新曜社）など。

武内　清（たけうち　きよし）氏
上智大学総合人間科学部・教授
東京大学大学院教育学研究科博士課程退学。東京大学助手、武蔵大学専任講師・助教授・教授を経て、1988年より現職。主な著書に『キャンパスライフの今』（編著、玉川大学出版部）『大学とキャンパスライフ』（編著、上智大学出版）など。

中間　玲子（なかま　れいこ）氏
福島大学人間発達文化学類・准教授
2001年、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士（教育学）取得。奈良女子大学文学部助手を経て2005年10月より福島大学人間発達文化学類助教授、2007年4月より現職。主な著作に『自己形成の心理学』（風間書房）など。

財団法人電通育英会　理事長
松本　宏

電通育英会は、昭和38年の設立以来、数多くの大学生の育成に携わってまいりました。その支援は経済的なものだけに留まらず、学業面・生活面も含めたトータルな支援を目指してきました。

最近では、「大学生のキャリア形成支援」というテーマに強い関心を持っております。こうした流れの中で、昨年「大学生のキャリア意識調査２００７」を実施いたしました。実施にあたっては、溝上先生はじめ、京都大学高等教育研究開発推進センターの多大なご協力をいただきました。

本調査では、「アルバイトは大学生のキャリア育成にあまり役立っていない」という特徴的な結果が出てきたこともあり、マスコミからの問合せなど、様々な形でのご評価をいただいております。

そうしたことから、京都大学とのご縁をいただき、今回共催の席に名前を連ねさせていただけることになった、という経緯でございます。

私どもでは今後も、大学生の人材育成にも関心を持ちながら事業活動を展開してまいります。本フォーラムでの、様々な成果や知見を、財団の今後の活動に役立てていきたいと考えております。熱心なご討議を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

登壇者のプ

川﨑　友嗣（かわさき　ともつぐ）氏
関西大学社会学部・教授（心理学専攻）キャリアデザイン担当主事
日本労働研究機構研究員を経て、1997年関西大学社会学部助教授、2003年より現職。専門は職業心理学、キャリア心理学。近年は特に若年者のキャリア自立に関する研究を行っている。主な論文に「大学におけるキャリア教育の展開一学ぶ力と生きる力の教育一」（『大学と教育』No.41, 44-62., 2005）。

松下　佳代（まつした　かよ）氏
京都大学高等教育研究開発推進センター・教授
1991年京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。京都大学教育学部助手、群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育教授システム開発センター助教授を経て、2004年より現職。主な著書に『パフォーマンス評価』（日本標準）、『大学教育学』（共著、培風館）など。

河村　能夫（かわむら　よしお）氏
龍谷大学・教学部長　経済学部・教授
1944年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学。コーネル大学大学院博士課程修了、Ph.D.（発展社会学）取得。龍谷大学経済学部講師・助教授を経て、1985年同教授。同大学大学院経済学研究科長、副学長等を歴任、2007年より教学部長。2004年より大学コンソーシアム京都アカデミックアドヴァイザー。

久保　玲士（くぼ　れいし）氏
広島県立祇園北高等学校・教諭
広島県出身。立命館大学法学部卒。広島県教育委員会指導主事、広島県東京事務所主任主事を経て特殊法人国際交流基金。同基金クアラ・ルンプール日本文化センターで副所長として政府間レベルの文化・学術交流の実務を統括。2004年から広島県立廿日市西高等学校進路指導主事、2008年から現職。

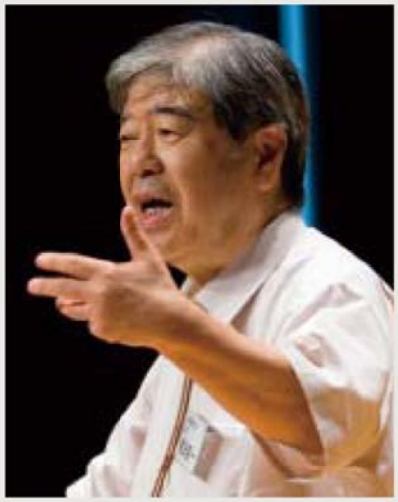
渡邊　三枝子（わたなべ　みえこ）氏
筑波大学・特任教授　キャリア支援室長
1980年、ペンシルバニア州立大学大学院で博士号（カウンセリング心理学）取得。日本労働研究機構、明治学院大学教授を経て、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授。2006年に定年退職、特任教授として筑波大学キャリア支援室長、現在に至る。主な著書に『新版カウンセリング心理学』、『キャリアカウンセリング入門』、『新版キャリアの心理学』（以上ナカニシヤ出版）など。

白井　利明（しらい　としあき）氏
大阪教育大学教育学部・教授
1956年愛知県生まれ。1979年愛知教育大学教育学部卒業。1984年東北大学大学院教育学研究科博士課程後期中退。1984年大阪教育大学教育学部助手・助教授を経て、2001年より現職。博士(教育学)、学校心理士。主な著書に『やさしい青年心理学』（有斐閣アルマ）、『よくわかる青年心理学』（ミネルヴァ書房）など。

牧野　亮（まきの　りょう）氏
広島県立呉三津田高等学校・教諭
1960年生まれ。広島大学教育学部卒。地理歴史科（日本史）を担当。校務分掌は教育研究部。教科とキャリア教育を有機的に連携させることで、生徒の学びの動機を喚起し、「自律的な学習者」を育成するプログラムの継承・発展をめざしている。

これからの大学教育が育てるべき人間像

兵庫教育大学　学長・中央教育審議会副会長　梶田叡一



ゆとり教育世代の現代大学生

大学で学生をどう育てていくか、ということを考えるとき、その前提として、いくつか認識しておかなければならないことがあります。

今日の大学生は、これは日本の20歳前後の若者に共通することですが、90年代初頭から約15年続いた「ゆとり教育」を受けた世代です。

子供は素晴らしい可能性を持っている、子供の好きなようにやらせれば伸びる、という考えで行われたのが「ゆとり教育」です。しかし実際に90年代に起きたのは、学力の低下、不登校の増加、様々な非行の頻発、ということでした。それでも、こうした実態を見ずに、子供を信頼すればなんとかなる、とやってきたわけです。そのため、今の大学生には色々な問題が出ています。

まず、学力が低い。これは小中高のカリキュラムそのものがそうなっていたことによります。都道府県の名前や位置すら覚える必要がなかったんですから。IEA（国際教育到達度評価学会）が世界約40ヵ国の小中学生を対象に行っている国際数学・理科教育動向調査というものがあります。70年代から継続的に行われている調査ですが、日本の子供の学力はコンスタントに落ちています。学力だけでなく、意欲も思考力も落ちています。またOECD（経済協力開発機構）が2000年、2003年、2006年に実施したPISA調査でも、主要各国の高校生と比較して基礎的な読解力などの点で、日本の高校生には大きな課題があることが明らかになっています。

さらには、世の中が豊かになって寛容になると、うるさいことを言う人間がいなくなります。90年代からの「ゆとり教育」では、「生徒を叱るな」、「頑張れと言ってはいけない」ということが盛んに言われました。その結果、内的な衝動をコントロールできない子供たちが育ちました。つまり、豊かで寛容な社会のネガティブな面が、いまの若者たちに出ているわけです。そして、そうした若者たちがいま大学に来ている、ということをまず頭に置く必要があるのです。

進学率の上昇、全入時代、非アカデミック化

こうした若者たちを対象とした現代の大学教育のあり方を考えようとする場合、少なくとも次の三つの基本特性を踏まえなくてはなりません。

一つは、進学率の大幅な上昇です。私が大学に入った時には、大学進学率は9％と言われていました。いまやほぼ50％です。これは、昔なら大学に来なかった多くの若者が大学に来るようになった、ということを意味しています。

アメリカでも同様の現象が起こりました。それで、アメリカの大学論では大学教育のことをHigher educationではなく、Post Secondaryと表現するようになりました。つまり、大学が高校の延長になってしまっている、ということです。学生の方も特別な思いで大学に来ているわけではありません。みんなが行くから来ました、という感じです。したがって、意欲も学力も将来展望もあまり持っていない。

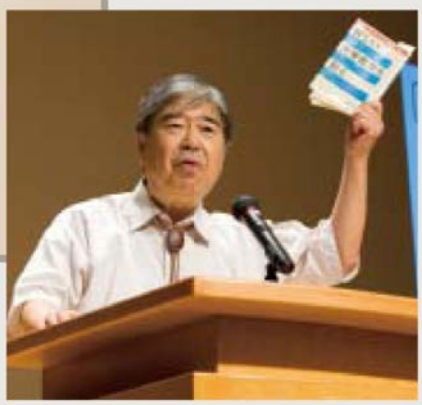
昔は大学に行くといえば、将来の各界の指導者というイメージを自他共に持っていました。しかし、今や職業に就く前の一つのステップでしかないわけです。

二つめは、少子化の影響で大学の志願倍率が低下し、ほぼ全員入学に近くなっているということです。今年度は、私立の四年制大学の47％が定員割れといいます。国立大学でも、地方の総合大学は厳しいと聞いています。

学生が来てくれるだけでありがたい話なのですから、もはや大学に入る資質を問う状況ではありません。そうなると、大学生ならこれは分かっていて当然だとか、知的な関心を持っているはずだとか、そういった従来の考えは通用しません。いまの大学は肩肘張らなくても入学できます。そして、そこから出てきている大学生の姿があります。大学教育の内容も方法も、こうした現実に適合するものに変えていかざるをえないのです。

三つめは、大学教育の領域の構造変化です。60年代前半までは、大学といえば法学部・経済学部・文学部・理学部などが中心で、どこかアカデミックな雰囲気がありました。「そもそも論」を嫌でもせざるをえなかった。いまは大学教育といっても必ずしもアカデミックではありません。60年代後半から工学部の比重が大きくなり、その後、例えば福祉とか国際といった色々な名前の学部ができ、最近では不動産学科やマンガ学科まである。一つの狭い実用的な領域について、世の中ですぐに通用する専門性を身に付けるという傾向です。

これは良し悪しを述べているのではありませんし、昔の姿に戻せということでもありません。ただ、同じ大学生といっても、昔のようにアカデミックな学びをすることと、例えば介護の資格を取るために実際的な知識を学び現場で実習もして、ということとでは、頭の働かせ方も生活の仕方も違ってくるだろう、ということです。



※「学士力」＝これからの大学卒業者に期待されるもの
（中教審大学分科会）

1. 知識・理解
   （1）多文化・異文化に関する知識の理解
   （2）人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能
   （1）コミュニケーション・スキル
   （2）数量的スキル
   （3）情報リテラシー
   （4）論理的思考力
   （5）問題解決力
3. 態度・志向性
   （1）自己管理力
   （2）チームワーク、リーダーシップ
   （3）倫理観
   （4）市民としての社会的責任
   （5）生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

これからの時代に必要な「ビジョンのある大学教育」

そういうことを踏まえて、これからの大学教育では何を育てなければならないのか。その参考となるのが、現在中教審の大学分科会で議論している、※「学士力」です。実は私自身は、「学士力」という括りで、現実には多様なあり方をしている大学生を一律に論じることには賛成していません。ただ、いまの混沌とした大学教育のイメージに対し、新しいビジョンの持ち方を模索していく上で、この「学士力」の提案について考えてみることも意味があるのではないか、と思っています。

最後に、マクロな面から二つだけ申し上げておきます。小学校から大学まで、あるいは生涯学習全体を通じて、人間としての発展成長のためには二つの軸を忘れてはならない、ということです。一つは「我々の世界」を生きる力が身に付いていくということであり、もう一つは「我の世界」を生きる力が育つということです。

「我々の世界」というのは世の中、社会のことです。例えば、就職をすれば誰しも何かしら具体的な役割が与えられます。もっと言うと、社会の中で生活していく限り、色々な役割を持ち、それにまつわる期待を周囲から投げかけられます。それらをきちっとこなしていく力と同時に、世の中での期待に応えていくという責任感を持たなければなりません。これが「我々の世界」を生きる力です。

しかし、人は世の中との関わりだけで生きていくわけではありません。自分の命、自分の人生をどう生きるか、という「我の世界」があります。生きている限り、人生の様々なステージに応じて、日々を深く充実した形で生きていかなくてはなりません。これが「我の世界」を生きる力です。

この二つの生きる力を、幼稚園から始まった組織的な教育の仕上げという意味においても、大学生の間に身に付けさせたいと私は思います。

そういうことも含めて、これからの時代は、大学生が何を学び、どう育ったか、という検証を、各大学がそれぞれの実態に即してやっていかなければなりません。教育の改善だ、改革だ、といっても、その対象となる相手と噛み合わなければ仕方ありません。大事なのは、学生の実態をきちんとふまえることです。エビデンス・ベースドでいかなければ、全部宙に浮いた話になってしまいます。そのことを、これからの大学教育ではもっと意識していかなければならないのではないか、と思います。

キャリア意識と大学教育

東京大学 大学院教育学 研究科長 教育学部長 金子元久

は大学教育には何が必要なのか、ということについて考えたいと思います。

「キャリア意識」と「大学教育」をどう考えるか

「キャリア意識と大学教育」を考えることには、幾つかの社会的な理由があります。まず、よく言われていることですが、「就職のミスマッチを防ぐには、キャリア意識を育てることが重要である」ということ。それから、「学生がちゃんと勉強しないのは将来の目的が明確でないから」という意識が一般的にあること。また、「大学教育はもっと職業生活に結び付くべきである」という考え方も社会的に強いものがあります。

ただ私は、こういった問題の立て方が事実であるのかどうか疑問に感じますし、違った視点から考えてみる必要もあると思います。その上で、で

若者の環境とキャリア意識の変化

さて、最近の若者についてよく言われるのは、「豊かな社会の中で無気力になり、自分がやりたいことが分からなくなっているのではないか」ということです。

確かにそうかもしれませんが、一方で、若者の置かれている環境の変化も重要です。例えば労働市場は非常に流動化していて、良い大学を出て良い会社に行けば安泰、とはいかない時代です。また、いまは一つの会社が様々な事業を展開していて、どの会社が何をやっていると一言では説明できません。また、高等教育がユニバーサル化し、進路選択の機会が増えていることがむしろ目標を見えにくくしている、ということもあります。

そうすると、若者の自己認識と社会認識がいずれも低い、というのも当たり前と言えるのではないでしょうか。若者を取り巻く環境と、そこでのキャリア意識がどのように変化しているのかをきちんと認識していくことが必要だと思います。

高等教育のユニバーサル化、いわゆる大学全入時代に突入したことでよく指摘されるのは、学生が勉強しなくなったということです。私どもで行った調査の結果を見ると、高校3年生の半分近くはほとんど勉強していません（図1）。大学進学者でも、約3割は勉強時間が1日1時間に達していない。もちろん、一方では1日4時間という人も同程度いるわけで、大きく二分している状況です。これは、受験制度による勉強の強制が一定の学力や勉強習慣を保証した時代の終わりを意味します。

また、大学で何をやりたいのか、という意識がはっきりしていないことも事実で、「やりたいことがみつからない」という大学生が5割近いという状況です（図2）。学年を追っても数値に明確な変化はありません。つまり、大学教育の結果として「やりたいことがみつかる」ということが起こっていないのではないか、ということになります。

古典的な大学教育理念の空洞化

こうした状況から、私は古典的な大学教育の理念が空洞化してきたと考えています。「学生には既に将来展望があり、授業に期待するのは知的な刺激であるから、大学教育は最先端の研究を見せていればいい」という昔ながらの考え方は、もはや通用しません。現実は、大学が学生にきちんと教えることを要求しています。

ただ大学教育というものは、教育する側の要因もありますが、教育される側の学生についても、学力や勉強の習慣が関係してきますし、あるいは社会認識や自己認識といった内面的な問題も重要な要因になってきます。

現代の大学生の大きな傾向としては、明確な目

標を持っていないこととも対応しますが、「授業が自分のやりたいことに関わっている」と感じていない割合が4割近くに達しています。そして注目すべきことに、かなりの学生が「授業を通じてやりたいことを見つけたい」と思っています（図3）。

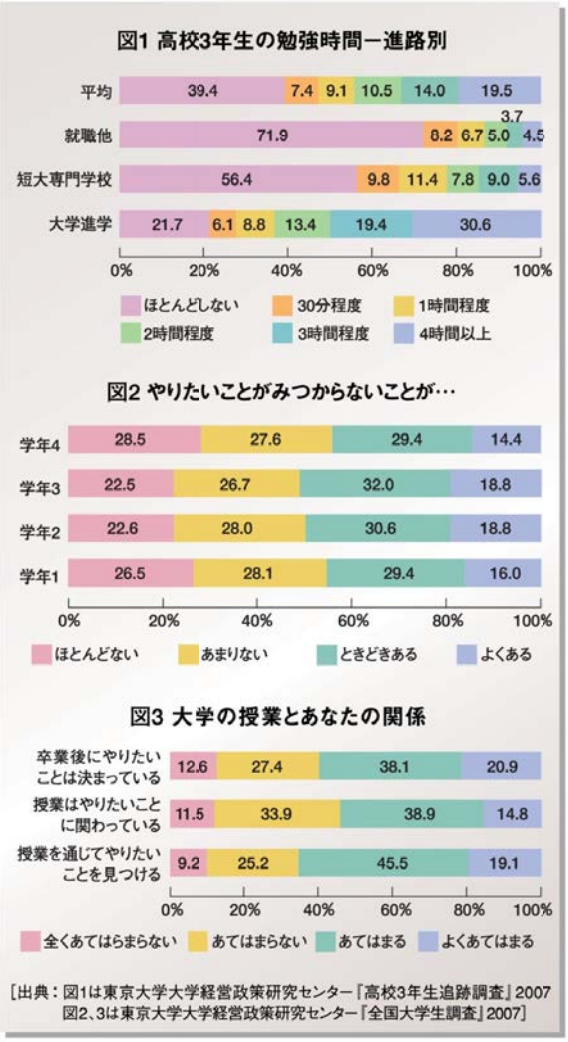
つまり授業に対する期待は高いわけで、大学教育の課題は、そういった期待に応えることを前提として授業や教育を行っているのか、ということにあります。

注目されるコアコンピテンス概念

次に、大学教育と仕事にはどういう関係があるのか、という問題に移ります。よく言われるのは、「高等教育の専門分野で習得した知識技能が、職業で必要とされる知識技能につながる」という直線的な考え方です。しかし実際には、大学での知識を社会で直接生かせる人はあまりいません。大学で習う知識が細分化しすぎていること、また、社会で必要な知識は急速に変化するため、それに対応する知識を供給することが無理だというのがその理由です。

これに対して、大学教育で身につけるべき能力として最近よく言われるのがコアコンピテンスです。私はコアコンピテンスには思考能力、コミュニケーション、意欲という三つの側面があると考えています。これらは、いわば家庭で形作ることができるものです。しかし、だからといって家庭が大切だとしてしまうと、良い家に生まれて良いしつけをすれば良い能力がある、という階層主義になってしまう。これでは教育機関の責任放棄になりますし、社会的にも望ましくない。

ですから大学での教育とコアコンピテンスとをどう結びつけるか、ということが重要になってきます。



［出典：図1は東京大学大学経営政策研究センター『高校3年生追跡調査』2007
図2、3は東京大学大学経営政策研究センター『全国大学生調査』2007］

学びのポジティブなサイクルを作る

最後に、大学教育に何が求められているかという点ですが、インターンシップなどのキャリア教育へのニーズは確かに高いものがあります。しかし私は、やはり基本は授業だと考えています。では、学生が意味のある授業だと感じるのはどういう授業なのでしょうか。調査によるとこの点で学生は、確実に学問の基礎を教えるということが必要という学生と、将来に役立つ実践的な知識や技能を教えることが必要という学生、この二つに分化しています。

他方で学生が共通して授業に求めているのは、ある一つの分野を総合的に教えること、自分のレベルにあっていること、授業の意義や必要性を教えること、この三つです。つまり学生は、自分が何を必要としていて、学んでいることがそれにどのように適応しているか、というレリバンスに興味を持っているわけです。

ここから、現代の大学教育の鍵は、授業への主体的な参加、勉強へのインボルブメントをいかに作っていくかということにあると考えます。

一般的に言えば、学習体験が深いものであれば、学生はその体験をポジティブに意味づけます。そうした体験は自分の将来像を考えることに繋がりますし、自信も付きます。そのことが意欲・興味を生み出し、さらに授業に参加する意欲に繋がっていく、というサイクルが出来上がることになります。おそらくコアコンピテンスも、こういったサイクルが働くことで形成されるものだと思いますし、またそうして形成されるべきものだと思います。そのポジティブなサイクルをどのように作っていくのか。これが大学教育にとって最大の課題だと私は思います。

アメリカでのキャリア発達研究の理論的展開
―なぜ進路指導からキャリア支援なのか―

筑波大学 特任教授 キャリア支援室長 渡邊 三枝子

キャリア支援の起源

キャリア支援の起源は、100年前のアメリカの職業ガイダンス(vocational guidance & counseling)にまで遡ります。この職業ガイダンスからキャリア支援への移行はなぜ起こったか、それを支えた理論であるキャリア発達とはどういうもので、時代の移り変わりとともにどう変わったか、そしてそれはキャリア支援という活動にどのような影響を与えているのか。まずはこうしたことをご説明します。

100年前の職業ガイダンスは、個人の興味や能力や希望と、それに適した職業とを一致させるという、いわゆるマッチング理論によるものでした。その対象者は、義務教育修了で就職する若者でした。職業経験が全くない若者が初めて社会に入っていくときには、それが最も適切な援助方法だったということです。

しかし、若者たちの職業選択行動には色々な要因があります。社会構造が大きく変化してくると、その変遷の激しさが若者に与える影響というものを考慮する必要が出てきます。また、マッチングを成功させるためには、就職後の環境への適応行動についても考える必要があります。そのため、職業ガイダンスを行う専門家は人間の行動に目を向けざるをえません。こうした必然性から、職業ガイダンスが心理学の知識を借りるようになり、後の1950年代にカウンセリング心理学という学問分野になりました。

キャリア発達研究の誕生

そうして生まれたカウンセリング心理学の研究者であるドナルド・スーパーは、1950年代初頭に、15歳の少年を30年以上も追跡して職業発達の段階を確認するという研究を始めました。しかし、この研究は極めて困難なものとなります。1950年代から1980年代は、アメリカ社会と産業構造が激動した時代でした。そういった大きな環境変化が若者に与える影響、若者のキャリア行動やキャリア発達に与える影響というものを、研究開始時の概念では解析しきれなかったのです。

一方、このスーパーの研究に触発されたのが、産業組織心理学者のエドガー・シャインです。1960年代後半、彼はキャリアアンカー理論を提唱し、企業内での人材育成のためには、就職して10年くらいの間に、若者たちのキャリアアンカー(周囲の状況や仕事の変化に関わらず、自己の内面で不動となる価値観や自己概念のこと)を育成することの必要性を指摘しています。

これらのことがルーツとなり、キャリア発達という言葉が1960年代終わりから1970年代に生まれることとなります。マーティン・カッツは、この流れを「経済を父とし、イデオロギーを母とし、一時期教育界を住処とし、心理学を友として育った」と表現しています。

変わりつつある「キャリア」

現在、アメリカのキャリア支援を支える理論は、キャリア発達研究の次の段階に入っています。グローバリゼーションが進んだ21世紀は、例えばサブプライムローン問題や原油価格の高騰など、突然巻き起こる変化が我々の生活に大きな影響を与える時代です。こうした状況下では、キャリア研究はキャリア発達から新しい段階に入らなければならないのではないかという認識が、アメリカのカウンセリング心理学や産業心理学の領域で広がっており、大学等における

キャリア支援のあり方にも影響を与え始めています。

アメリカのこうした分野の研究は、研究が先にあって実践が生まれるのではなく、実践が先にあって研究が生まれてくる部分が強い、というのが私の印象です。ですから、理論が変わってきたということは、キャリア支援の実践上、あるいは実践の対象である大学生や小中高生、もっと言えば大人も含めて、職業と人間との関わり方が変わってきている、または変わらざるをえなくなってきているのではないか、と私は見ています。

また、アメリカの心理学やカウンセリングの理論家は、キャリアという概念は20世紀のピラミッド型の組織社会の中で生まれた言葉だ、ということを言い始めています。それは決められた階段を上がっていくことが良い事だ、という20世紀の価値観による働き方ではないだろうか、というわけです。そして21世紀においては、これからの若者が生きていく社会のキャリアは階段状ではなくて水平に広がっていく、としています。いままでの経験を積み重ねるという意味ではなく、いまある自分を生かして新たな道を開いていく、横に広がっていくのが新たなキャリアではないか、というわけです。キャリアという言葉で表現されるイメージが変わりつつあることが分かります。

日本のキャリア支援の現状に感じる疑問

話を日本に戻すと、今の大学のキャリア支援の目的は、社会的自立をしていくのに必要な能力を育てることにあります。自立していくためには、社会の変化に敏感でなければならないし、社会の変化を導いているものに対しても敏感でなければならない。その影響を自分がどう受けているのかを知らなければならないし、また同時に多くの価値観を異にする人々と共に生きていかなければならない。これは現実ですから、キャリア支援はそこからしか出発できません。

では、私たちの活動は本当にキャリア支援になっているのでしょうか。人間の複雑さ、社会の複雑さを、キャリア支援の指導者はどこまで認識できているでしょうか。キャリア支援とは言いながらも、その実態は100年前のマッチング理論と何ら変わっていないのではないか、という疑問を私は感じています。

未来を見る力を育てる

では、日本のキャリア支援は、これから何を考えていけばいいのでしょうか。私は、未来を決めてしまうことではなく、未来を見ていく力を育てるのがキャリア支援であると考えています。キャリア支援というと、予め自分の十年先を決めてそれに向かっていく、という印象が強いですが、そうではないのです。自分をリフレクションし、社会の環境を見ていくなかで、今という時間の延長線上にある未来に目を向ける必要がある。未来を視野に入れることができなければ計画は立てられません。

時代の変化が激しくなっていけばいくほど、そうした環境のなかでも個人が自分の職業選択をできる力を育てるよう支援することに焦点を当てるのが、本来のキャリア支援ではないかと思います。

こうしたことは、キャリア支援を行う我々教職員が意識改革をしないとできないことです。ということは、実はキャリア支援というのは、大学における教育改革の理念と重なるということです。それだけの認識と覚悟がなければ、いくらキャリア支援・キャリア教育という名前が付いているとしても、単なる出口指導に終わってしまうのではないか、という懸念を私は抱いています。

参考：キャリアに関連する用語の定義

[キャリアとは]

個々人が、生涯にわたって遂行する様々な経験の累積（立場や役割の連鎖）：その過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積。

[キャリア教育とは]

教育改革の理念であり指針：キャリア発達や個の自立を促す視点から、従来の教育のあり方を幅広く見直し、改革していくための理念や方向性を示すもの。児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育。

［出典：いずれも文部科学省「キャリア教育の推進 報告書」］

青年期論から見た大学生の成長
―何が課題か―

大阪教育大学　教育学部　教授　白井　利明

青年期の諸課題と歴史的な変遷

青年期は、性の芽生えから始まります。そこには、いくつかの課題が存在します。まず、恋愛や結婚、つまり性の発達や次世代の家族形成が課題となります。また、アイデンティティの達成や人生観の確立といったことを考える時期です。必ずしもそれらの答えは出ませんが、それも含めての青年期ではないかなと思います。

それから友人関係の互恵性。ギブアンドテイクの関係です。青年期の友人関係は、単にその場が楽しいだけではなく、人生の友を見つけられるものだと思います。

職業能力の形成。一つの職業を選ぶことは、多くの仕事をあきらめることでもあります。それも成熟の過程では避けられないことです。

そして、社会常識を身につけ、社会に入る、ということも非常に重要な青年期の課題となります。

中世では、子どもは小さな大人であり、若者期は大人になる準備段階で、そして、社会の体制に適応していきました。しかし近代以降は、子どもには固有の価値があり、青年期は自己探求の時期で、その結果、今の大人とは異なる社会を構想していく担い手となる。そんな対比ができると思います。そうした時期として、新しい青年期の可能性があるのではないかと思います。

モデル不在、個人化時代の問題

かつては蛙の子は蛙ということで職業が決められていました。これは、ごく身近に自分のロールモデルがあり、若者が労働や社会と密接に関わっている環境でした。しかし今はモデルがいません。若者が大人になったときには違う社会になっている可能性もあります。大学で学ぶことが社会でどう役立つのかも分かりません。

今日の大学生が抱える様々な問題は、こうした新しい可能性が見え隠れしながらも、なかなか実現しないことにあるのではないか、と私は見ています。

また、自己の探求が、個人化・心理化されている、ということもあります。ある研究によれば、自分がどう大人になるのかということは、かつては、就職すれば大人、結婚すれば大人と人生の出来事によって区切られていましたが、今ではあまり関係がないそうです。むしろ、自分は十全な人間である、自分というものに満足している、という客観的基準のないものが大人感と関連しています。客観的基準にも外的な出来事とも関連せず、その人がそう思えばいいとなっているわけで、脆さや危うさを感じます。

それではどうしたらいいのか。私は、自己の発見というものは、世界の発見と密接に関わっていると思います。自分が何をやりたいかを考えるだけではなくて、世の中にはどんな職業があるのか、世界の仕組みはどうなっているのか、どんな人たちがいるのか。そうした世界の発見と自己の発見が、パラレルに行われなければならないのではないか、と考えています。

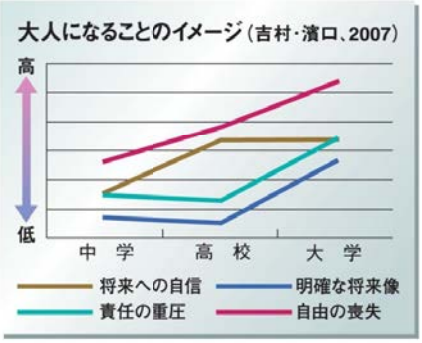
若者が将来に抱く自信と不安

青年期は「自我の解体と再編成」を行う時期です。児童期に親の監督や保護の下で、どちらかといえば親の価値観を内面化してできた価値観を、青年期に一旦崩していく、あるいはそれを吟味していく、ということです。

それは役割実験によって行われます。安全なところ

に身をおいて様々な経験をする中で、自己概念を修正する。例えばアルバイトなどがそれにあたります。アルバイトというのは、やめてもかまいませんし、生活に直接影響するわけでもありませんから、自分の安全性が保たれています。つまり、悩んだり、模索したり、失敗することが許されているということです。

それでは、青年は大人になることにどのようなイメージを抱いているのでしょうか。左図のような調査結果があります。



この結果からは、将来に対して自信を増している、明確な将来像を持っている、という肯定的な自信が青年期に増えていく一方で、大人像というものが非常に不自由で、かつ、重圧を感じる度合いも青年期に増大する、ということが分かります。自分が大人になることに自信はあるものの、漠然とした不安も同時にあるということを示しています。

社会で役立つ大学教育とは何か

個人というものがあって、その個人がやりたい仕事が明確にあって、そして職業を実現していく。人間はそのような個人として完結したモデルで動いているわけではありません。社会関係資本と呼ばれるような、信頼できる人間関係や社会関係との相互作用を通じて、自分のやりたいことに気が付いたり、行動を選択したりしているのだと思います。

労働政策研究・研修機構では、社会に出て役立つのは大学生活のどんな経験か、という調査をしています。そこで出てきたのは、実習、サークル、クラブ活動、インターンシップ、アルバイトといったものでした。ということは、大学の授業でも、体験型、参加型、問題解決型、あるいは社会に出て他人と交流する活動が効果的なのではないか、と考えられます。

そのことも含めて大学生側の課題をまとめてみると、批判的思考力、社会関係資本、コンピテンス、専門性、といったことになります。つまり、批判的思考力や社会関係資本といったものと教育をつなげていくこと、これが大学教育の課題になるのではないでしょうか。

理想的な初年次教育の姿

そこで実際にはどんな大学教育が可能になるのか、初年次教育を例にして考えてみます。通常は、大学教育への動機付け、学び方のスキル、あるいは高校時代の補習という内容が中心になります。

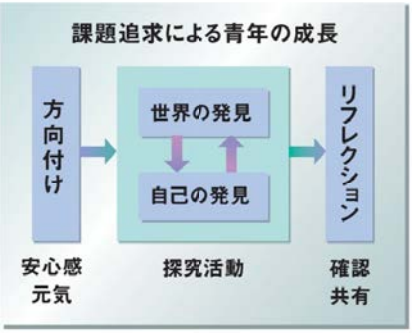
ここに私は、提案としてさらに四つのことを付け加えます。一つは学生をアカデミック・ラーニング・コミュニティの一員にしていくこと。我々教職員も、大学の学びの中のコミュニティを形作っていますが、その中に学生を位置づけていく。

二つめは、学生にどんな世界を提示し、認識を再構成していくのか、ということ。

三つめは、学生の学びあいを授業内外でどう組織化するのか、ということ。現在の学生は学習時間が少ないですから、授業中だけでなく、授業の外でも勉強する仕組みを作りたい。

四つめが、リフレクションで成長の確認と共有を行っていくこと。普通キャリア教育というと未来志向で、自分の将来像を作っていく方向に関心が向きがちですが、私は将来像というものは過去をくぐって出来てくる、と考えています。ですから過去をどう再構成するのか、というリフレクションが重要となってきます。

以上、大学教育への提案として、青年期発達の視点を入れてみる、ということをお話しました。安全なところに身をおいての役割実験、あるいは多様な大人や同輩との関わりの中で自分の視点を相対化していく、青年期の課題追求を専門性の学びの中に位置づけていく。そんなことを大学教育の中に仕掛けていく必要があるのではないかと私は考えています。



教科と連携をとって推進される総合的なキャリア教育を目指して

広島県立呉三津田高等学校 教諭 牧野 亮

偏差値重視ではない、新たな学力観の再考

本日は、私が勤務する呉三津田高校で行っているキャリア教育についてお話をさせていただきます。ただ、私は本校に赴任してまだ2年目ですので、この取り組みに最初から関わっていたわけではありません。前任者達から聞いた話をふまえ、お話をさせていただきます。

本校の取り組みの一つの契機になったのは、7限の授業を増やしたり、補習等を増やしたり、という学力向上のための取り組みを行った後にアンケートを取ったところ、その成果が保護者や生徒に認められていない、という結果が出たことです。懸命にやった取り組みだけにショックは大きく、これが本校が変化する大きなきっかけとなりました。

もう一つは、大学との連携授業です。出張授業的なものではなく、実際に学習内容面まで踏み込んだ形での連携が、国語科を中心になされました。その機会に、大学側が求める学力というのが、到達レベルではなく、将来成長が予測できる潜在的な資質、つまり学ぶ力を重視するようになっていること、そして思考力、意欲、表現力といった数字には表れにくい部分も求めてきている、ということを肌で感じることができたようです。

そうしたことを踏まえて、力づくで偏差値を上げる、というこれまでの対策を考え直すべく、教育研究部という組織が平成13年に誕生しました。現在、本校ではこの部に9名が所属しています。そこが中心になって、学力観の再考を進めてきました。その結果定義されたのが、次のようなものです。

学力＝学習時間×学習方法×学習動機
×メタ認知による自己認識の深化

学習動機というのは、なりたい自分を自覚させることです。すると逆に、現在の自分がどうか、ということも見えてくる。これがメタ認知になります。そして、この両者が見えれば、その距離を縮めていこうという気持ちが高まってきます。

新・学力観を実現する場としての「※総合的な学習の時間」

そういった新しい学力観を共通認識として持ち、それを授業に活かしていくために、授業ではこういう点を改善してほしい、ということで提示したのが、次の5項目です。

1. 学習動機として、「将来の自分の可能性を広げるために学ぶ」という発想を持たせる。
2. 学ぶことの意義を明確に意識させ、知識が生きて働く実感を経験させる。
3. 推測や仮説形成を大切にし、思考力を働かせながら学ぶ。
4. 生徒自身の自己評価力を育てる。
5. 自己表現力、問題解決能力を向上させる。

どれももっともなことではありますが、実際にクリアするのは非常にきつい内容です。また、どの教科でもすぐに動きが取れる、というわけではありません。そこで、これを試行する場所として注目されたのが、平成15年から高等学校で施行が義務付けられた「総合的な学習の時間」です。

※生徒が自発的に横断的・総合的な課題学習を行う時間で、高等学校では平成15年から始められた。学習指導要領に定められたもので、内容としては国際理解、情報、環境、福祉・健康などが例示されている。

「三津田ヶ丘の悦ばしき知」とは

呉三津田高校独自の「総合的な学習の時間」を目指していく、ということで出てきたものが、"La Gaya scienza a Mitsuta（三津田ヶ丘の悦ばしき知／通称GAYA）"です。この非常にハイカラな名称はニーチェの言葉から来ているそうです。

その目標は、自己の在り方や生き方を探求する意欲・態度を育てる、自己表現力を育成する、意識をともなった学びができる力を育成する、の3点にあります。時間数は、1～3年生の各学年で週1時間。教材は全て手作りで、毎時間ごとのプリントを1冊のファイルに綴じてポートフォリオ化します。評価は、関心・意欲、思考・判断、技能・表現、知識・理解の4つの観点から行います。学習形態はクラス単位で、グループ活動を積極的に取り入れます。また、担任と副担任によるチームティーチングで進めます。外部から講師をお招きしてのプログラムもあり、内容によっては学年全体や学校全体の行事になる、という形です。具体的な内容は、次の通りです。

	1学年	2学年	3学年
1学期	●オリエンテーション ●切り抜き新聞の作成 ●詩のボクシング	●詩のボクシング（クラス予選あり）	●社会への参画 ●詩のボクシング
夏休み前後	●学部学科研究 ●広島大学オープンキャンパス（全員参加）	●学部学科研究 ●広島大学オープンキャンパス（全員参加）	●自己PR文の作成
2学期	●三津田学問探訪（大学教授による学問紹介） ●読書会（クラス単位）	●修学旅行（班別自主研修の立案） ●三津田学問探訪 ●読書会（学年単位）	●パネルディスカッション
3学期	●ディベート	●ディベート	―――

GAYAがキャリア教育である由縁

GAYAを実行する上での留意点としては、以下の7点が挙げられます。

(1)教科学習とGAYAとの相互還流性、(2)視野の拡大をめざす体験活動、(3)活動に「拡散と収斂」の過程を取り入れる、(4)「選択」の重視、(5)自己評価の重視、(6)「競い合う」「高め合う」、(7)活動の連動による高次元への発展、の7点です。

(3)の「拡散と収斂」というのは、うちの学校独特なものだと思うのですが、どの活動の中にも必ず拡散と収斂、その過程を入れる。単に知って納得、という形ではありません。情報が入る、それを自分なりに考える、考えた結果を班内で発表して話し合う、そしてまた新しい視点から考え直して、また表現しなおしていく。その過程を取り込むことで、豊かな思考力を育むことが狙いです。

(4)の「選択」は、自分の興味関心の所在を活動の都度に確認していくということです。それぞれの活動は主に班ごとに行いますが、この班は全部違うものです。行事ごとに、自分は何に興味を持っているか、そのテーマごとに班を作るわけです。ですから普段は話をしないような者とも話す機会が出てきます。しかしそのテーマは、自分の興味関心に基づいて選んだものですから、共通項は存在する。それを元にして、話し合いのルールであるとか、他人を意識するであるとか、そういったことを進めていきます。

これらは、いわば技能を教える活動です。例えばコミュニケーション能力、文章を書くための技能、話し合うための技能。そういった技能面を取り込んでいます。普通でいえば、職業調べや学部学科調べなど、将来に向けて興味関心のある内容について学習を深めてみましょう、という流れが多いと思うのですが、GAYAでは、実際に社会で求められるような技能をトレーニングしていくという側面が強いものになっています。

GAYAと授業をいかに繋ぐか

最後に、現在の課題について申し上げます。一つは、やはりGAYAと授業との関わりです。この整理が必要だと思います。GAYAと教科学習とがやっぱり連動していかないといけない。私の個人的な印象では、各教科科目の中で先生方はやっておられるんだろうと思うんです。

というのは、いま本校では国公立大学の合格者数を増やすことが目標で、60%前後まで達していますし、難関大学への進学率も上がっています。ということは、どの教科でもそれぞれ工夫をされておられるはずです。ただ、その整理が遅れている。ですから、現時点で行われている指導の取り組みをうまく吸い上げていく、という形から入れば、より多くの教員が取り入れていけるものになるのではないか、と考えています。

二つめは、あまり言いたくありませんが、GAYAの形骸化です。平成14年からスタートして、一応3年間で学年進行のマニュアルができました。すると、どうしてもそれ以降、マニュアルに頼ってしまう部分が出てきます。中心になっていたメンバーがこの4月に抜けてしまったことも大きいのですが、やはり核になって動く人間が十分に継続的に育ってきていない、というのが正直なところ一番の課題です。今後そのあたりを、時間はかかるかもしれませんが、今一度うまく立て直していきたいと考えています。

パネルディスカッション 第1部
ダイジェスト

大学生のキャリア意識調査2007から示唆される現代大学生像

大学生研究フォーラムのパネルディスカッション第1部では、昨年、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会が共同で行った「※大学生のキャリア意識調査2007」の調査結果を、4人のパネラーが独自に解析し、そこから現代の大学生像を浮き彫りにしようと試みました。

※調査概要は、25ページをご覧ください。

出席者

司　会　京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授
溝上 慎一

パネラー　福島大学人間発達文化学類 准教授
中間 玲子

上智大学総合人間科学部 教授
武内 清

労働政策研究・研修機構 副主任研究員
下村 英雄

東京学芸大学教育学部 准教授
浅野 智彦

調査結果の概要報告

福島大学 人間発達文化学類 准教授 **中間 玲子**

大学でのキャリア教育やキャリア形成支援事業は、大学生のキャリア形成にどのような影響を与えているのか。大学生のキャリア形成を理解するために、「日常生活」と「人生」の2種類のライフに着目しました。

「日常生活」は、学業、クラブ・サークル活動、アルバイト、ボランティア、趣味、娯楽といった活動全般を、「人生」は職業、進路選択、生き方や将来展望などの人生設計を指します。

結果は以下の3点につき報告します。

①人生・将来に対する意識／人生設計を始めた時期、将来見通しの有無など

②学生生活に対する意識と実態／大学に対する意識、学生生活の過ごし方など

③上記の人生としてのライフと生活としてのライフの関連性

①人生・将来に対する意識

「将来設計はある」とはいえ、実際には「漠然としていて掴み所がない」ようであることが特徴でした。7割以上の学生が実際的な将来の見通しを持っているものの、その6～7割は実行できていない、あるいは何をすべきかまだわからない、と回答しています。

②学生生活に対する意識と実態

大学進学の目的は入学前、現在ともに「専門知識・技術の習得」が最も多く、次いで「教養や視野の拡大」でした。

大学生活では「何事もほどほどに」を除くと「勉強第一」が最も高いものの、「授業外学習を1日1時間もしない」学生は1、3年生ともに7割を超え、授業に関係のない勉強も「1日1時間もしない」が、1、3年生ともに8割を超えていました。

③「人生」と「生活」のライフの関連性

大学におけるキャリア教育は、将来見通しを持つだけでなく、その実現の可能性を高める傾向にあり、同時に、ボランティアやインターンシップ、参加型授業など、体験学習的な授業においても同様の傾向が見受けられました。キャリア形成の程度と日常の過ごし方の

関連については、将来見通しの実現に向けて理解・実行できている学生の方が、主体的に勉強している傾向でした。

ここから、2種類のライフ、生活と人生という2つのライフを、有機的に連関させながら形成していくことが重要ではないか、つまり、単に大学で勉強することが重要なのではなく、自らの将来、成長に向けて、何が自分にとって重要であるかを意味づけながら勉強することが重要なのではないかと考えられました。

大学教育、チャーター、学生の視点からの考察

上智大学 総合人間科学部 教授 武内 清

今回の調査で印象に残った点は以下の3点です。第一に、学生たちは大学に専門的知識・技術の習得と、教養や視野の拡大という2つを強く求めていること。第二に、生活の重点は「何事もほどほどに」が多く、勉強だけではなく、部・サークル活動、友人関係、趣味活動、資格取得、アルバイト等、さまざまな活動を組み合わせて自分を試し、自分の将来を見極めようとしていること。第三に、大学や学科、専攻によってキャリア展望やその準備・実行はかなり違っているということです。

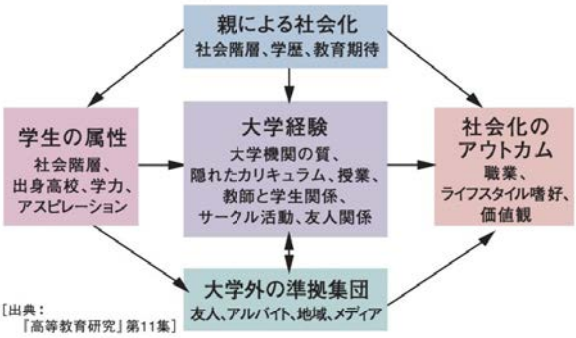
学生の社会化のモデルとして、図1を考えることができます。大学生のキャンパスライフを構成する要因として、「親による社会化」「学生の属性」「大学経験」「大学外の準拠集団」「社会化のアウトカム」の5つがあります（大学生のキャリアは「社会化のアウトカム」に入ることでしょう）。

「親による社会化」は、親の階層、文化資本、学歴などが、子どもの属性を経由して影響しています。「学生の属性」は、高校時代の勉強や読書や異性関係の経験が、大学生活の送り方に影響を与えています。そして、「大学教育や大学での経験」が、キャンパスライフとキャリア展望に大きな影響を与えています。このような学生の社会化のモデルを念頭におくと、さらに分析すべき点が出てくると思います。

さらに、各大学に対する社会的定義・評価を「大学チャーター」と呼ぶとすると、これにも学生は影響を受けています。我々の調査では21大学を偏差値、伝統、規模などの「大学チャーター」によって4つの大学類型に分け、大学生の行動や意識の違いを分析しています。図2は、大学進学の理由を、大学類型別に示したものですが、「将来について考えるために」は「伝統総合大学」で多く、「資格などを取るために」は「新興大学Ⅰ、Ⅱ」で多いという結果となっています。

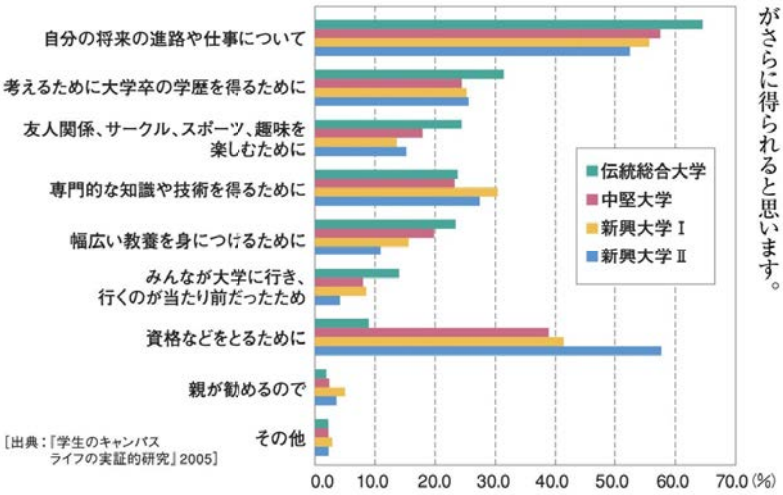
以上のことから、大学生の社会化モデルや大学チャーターモデルを念頭に、大学生のキャリアやキャンパスライフを規定しているさまざまな要因の影響を考察すると、大学教育に有益な知見がさらに得られると思います。

図1 学生の社会化のモデル



［出典：『高等教育研究』第11集］

図2 大学類型による大学進学理由の違い



［出典：『学生のキャンパスライフの実証的研究』2005］

大学生のキャリア形成論の本質的な問題とは何か

労働政策研究・研修機構　副主任研究員
下村　英雄

大学生のキャリア意識形成は、社会的状況を反映した問題として捉えられる側面があります。

例えば、(1)フリーター、ニートに象徴される若者の不安定就労問題、(2)高学歴化が進み大学生が多様化していること、(3)90年代の不況期以来、産業界の人材ニーズが変化したことなどが、大学生のキャリア意識形成議論には影響していることでしょう。

しかし、大学生のキャリア意識形成には、こうした時代の影響に左右されない、より本質的な問題という側面もあるのではないでしょうか。

まず、今回の調査で私が着目したのは、第一に、将来の見通しは7割が持っているものの、そのために具体的に何をするのかは曖昧であるということです(図1)。

第二に、学生の普段の日常生活の中で授業に組み込まれている「キャリア教育」の受講率は、将来の見通し「あり」の学生の方が多く、将来の見通し「なし」の学生では少ない傾向がありました。それに対して、就職に特化した「キャリア形成支援」にはそのような関係が見られませんでした(図2)。

第三に、約7割の学生が将来の見通しを持っているものの、何をしたいかでは「まあまあ何事もほどほどに」という回答が一番多かったという点も着目すべき結果です。学生は進路やキャリア以外にもっと日常生活の中で幅広い関心をもっており、そのため何事もほどほどにやっていきたいという回答になるのだと考えます。

ここでは、さらに私が参加した調査結果もご紹介したいと思います。

就職活動が終わった大学4年生が第一志望で内定が取れたかどうかに一番大きな影響力を持っていたのは何かを調べたところ、勉学、授業、単位取得などが関連しているという結果でした。重回帰分析で詳しく検討した結果、勉学の他に友人関係も第一志望の内定をとれるかどうかに大きな影響を与えていました。

また、他の調査結果では、7月時点でまだ就職活動をしている学生と第一志望の内定を取って就職活動を終えた学生では、就職に向けて努力した事柄が異なるということも分かりました。

早く内定が取れた学生は、プレゼンテーション能力、人間的な魅力を高め、情報収集や人脈を広げようと努力をしたと回答していました。結果的に、就職活動を早く終えることができた学生は、大学時代に、人脈形成能力、状況の変化に柔軟に対応する能力、自己表現力、人間関係を円滑にする力、熱意・意欲を維持する力などの力が身に付いたと回答していました。

これらの結果を総合的に解釈すると、大学生にとってキャリアや将来の問題は、日々の授業や友人関係などと分かちがたく結びついており、むしろその延長線上にあるように思われます。つまり、大学生のキャリア意識形成のより本質的な問題とは「日常生活」にあると考えられるのです。

今回のフォーラムで取り扱っている就職支援、キャリア教育、正課教育の3者間の関係に置き換えて考えると、大学生にとっての日常生活は正課教育であり、これと分離した形でのキャリア教育は学生にとって距離があるのだろうといえます。

理想的には、正課教育とキャリア教育を混ぜ合わせ、大学生の日常生活である正課教育の中に将来のキャリアが織り込まれている、そういった形でキャリア教育を提供するのが基本的な方向性だろうと考えます。

こうした形で正課教育・キャリア教育が大学生の日常生活に合った形で展開されていれば、おそらく就職活動に向けた就職支援も、大学生にきちんと響くのではないでしょうか。

図1

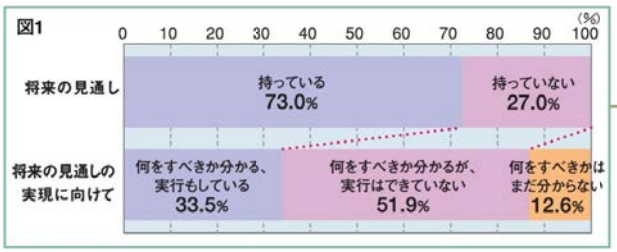
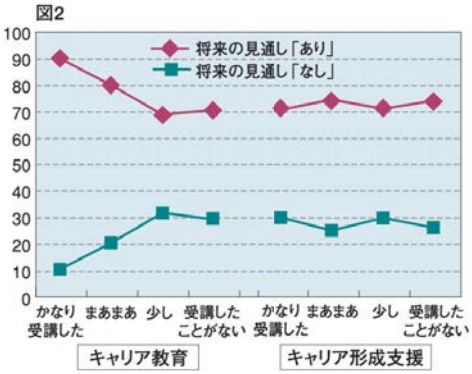


図2



大学生の人間関係と進路意識

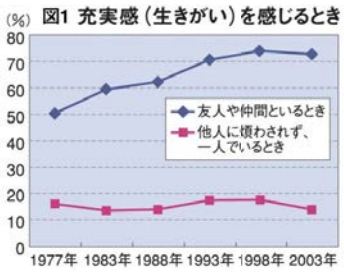
東京学芸大学 教育学部 准教授 浅野 智彦

今回の大学生調査は、大学生の生活を、生活と人生という二つの局面に分けたところに意義があります。親密な友達や親子関係に代表される親密な他者との関係からなる領域を親密圏とし、見知らぬ他者との関係からなる領域を公共圏とすれば、この二つの領域が、生活と人生という言葉に対応していると思います。

親密な関係の典型である友人関係は希薄化しているといわれますが、比較可能な時系列データのどれを見ても逆に濃密化しています。内閣府の時系的調査のデータで、充実感、生きがいを感じるのはどんな時か、という質問に対して、友人や仲間といるとき、と答えた若者の比率が80年代以降一貫して上昇しています（図1）。同じく、友人関係の満足度も、「満足している」と、「やや満足している」を合わせ9割を超えています（図2）。友人関係は希薄化しているのではなくて、逆に濃密化していることを、まず第一点目に指摘しておきます。

公共圏については、二つのことを指摘しておきたいと思います。

まず一つは、見知らぬ他者との関係が、政治的な市民性、シチズンシップの涵養にとって重要な意味を持つ、ということです。ボランティア団体、趣味のサークルに参加することで、社会の構成員への信頼が醸成され、自分と価値観の違う人たちと一緒にやるという作法を身に付けることで、政治的シチズンシップを涵養する効果があるといわれます。



内閣府政策統括官（2004）より作成

二つめは公共圏へのアクセスです。見知らぬ他者とのチャネルが社会経済的な地位の達成に有効であり、逆に持っていないことが地位達成に非常に不利に働くという研究結果が、ここ数年の間に積み重ねられてきました。

やや駆け足ですが、最後に、今回の大学生調査の結果を親密な関係と公共的な関係とに二つに分けたときに、それぞれの関係は進路意識にどういうインパクトを持っているのか、分析をしてみました（図3）。

Q13で将来設計に関する意識を尋ねています。これに親密な関係に関わる変数として、友人関係を重視する度合い、友人づきあいに費やす時間、それから親の関与を変数として投入しています。二つめは、公共圏に関する質問項目としてボランティアへの参加経験とインターンシップへの参加経験などを指標として投入します。三つめが、大学の教育の効果を測るために、キャリア科目の受講非受講と、キャリア講座の受講・非受講を投入します。最後に、基本的な属性として、学年と性別を投入します。

その結果、将来設計積極度を上げる項目は、友人関係を広く良好にもつということです。進路意識をポジティブにし、進路・将来設計に関する積極度、意欲を高めることに関連します。

逆に、ボランティアへの参加経験は将来設計積極度に対してはポジティブな効果もネガティブな効果も持っていません。インターンシップ経験、キャリア科目の受講は効果があります。ただし、キャリア講座受講は、プラスにもマイナスにも特に有意な効果はもっていない、と言えます。

その結果、友人関係など親密圏に閉じこもっていて公共圏の関係を持っていないと、移行過程に失敗するという、これまでの議論とは少し違った結果が出てきます。ここから先の研究テーマとしては、一体どういう友人関係がどんな効果を持っているのか、ということになります。友人関係も様々ですから、どのようなタイプの友人関係がどんなタイプの効果を持つのか、という詳細な分析が必要になってきます。そこがわからないと、支援しにくい、支援のしようがない、というところがあるのかと思います。

図3 将来設計とネットワーク
従属変数：将来設計（Q13の一部逆転総和）

	標準化係数β
（定数）	
あなたは大学何年生ですか	0.00
あなたの性別をお知らせください	-0.04
大学に友人関係を求める度合い（Q21−5の逆転総和）	0.13
友達づきあいに費やす時間（Q5−4−7の総和）	0.09
親の関与（Q22−1の逆転）	0.00
ボランティア参加経験（Q9−1−2の逆転）	0.04
インターンシップ経験（Q10−1−2の逆転）	0.09
キャリア科目受講（Q16−1の逆転）	0.09
キャリア講座受講（Q17−1の逆転）	-0.03
調整済みR2乗	0.06

パネルディスカッション 第2部
ダイジェスト

現代大学生像から見えてくる キャリア教育への示唆

大学生研究フォーラムのパネルディスカッション第2部では、第1部での議論も参考にしつつ、現代大学生の特徴をふまえた上で、今日行われているキャリア教育の問題点や将来的な可能性について、様々な角度から検討がなされました。

出席者

司　会　労働政策研究・研修機構 副主任研究員
下村 英雄

パネラー　関西大学社会学部 教授 キャリアデザイン担当主事
川﨑 友嗣

龍谷大学 教学部長 経済学部 教授
河村 能夫

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授
松下 佳代

広島県立祇園北高等学校 教諭
久保 玲士

大学におけるキャリア教育・キャリア形成支援の現状と課題

関西大学 社会学部 教授 キャリアデザイン担当主事
川﨑 友嗣

大学におけるキャリア教育・キャリア形成支援の流れには、インターンシップ、就職部からキャリアセンターへの名称変更、正課教育でのキャリア教育科目の展開、という3つの大きな潮流があります。

インターンシップは、大学全体の約65%が実施するまでに普及しました。しかしこれは大学単位の話で、学生数に占める比率は8.3%に過ぎないのが実態です。

就職部や就職課が、キャリアセンター等の名称に変更されたことは、キャリアの視点が大学の中に入ってきたという意味だと私は捉えています。いわゆる出口指導としての就職指導から、キャリアという視点で一人ひとりの学生の発達に関わるプロセス指導へ、という転換を意味していると思います。しかし実際には、キャリアの視点が十分に浸透しているとはいえず、名称だけが先行していることも否めません。

また、正課教育でキャリア教育科目が展開されるようになったとはいっても、小中高等学校では全ての教育活動を通じてキャリアに働きかけるのが普通です。大学だけがキャリア教育科目というものを単位化して実施しているわけです。またその教育内容も様々で、将来の働き方や生き方という視点から学生の意識に働きかけるものもあれば、就職支援の内容と変わらないものもあります。キャリア教育は各大学が独自の視点で取り組むべきことではありますが、どのような内容をどのように行うのか、それを議論する必要があるだろうと思います。

こうした状況下ですべきことは、やはり様々な要素を持っているキャリア教育・キャリア形成支援の取り組みを、まずはもう一度、大学の教育理念や教育目標に照らして体系化を進めていくということです。さらにプログラムだけではなく、学生一人ひとりの学びを体系化し、個別の対応を行い、それを系統性と統合していくことではないか、と考えています。

最後に、キャリア教育・キャリア形成支援の効果をどのように捉えるべきか、ということに触れておきます。

例えば、具体的なコンピテンシーやスキルの観点から効果を捉える方法があります。また、就職率を効果とする考え方もありますが、これはあまり意味がないと思います。客観的な指標が十分に定まっていないのが現状です。効果には短期的なものも中長期的なものもありますから、やはりこのこと自体、それぞれの大学で議論すべきだろうと思います。

一方では、内面的な効果を見るという方法もあります。「大学生のキャリア意識調査２００７」にもありましたが、将来の見通しを持っているか、それに関連する取り組みをしているか、態度や構えといったものがどの程度出来上がっている

か、これを効果として捉えるやり方もあろうかと思います。

キャリア教育・キャリア形成支援の役割は、現在と将来、学生の日常と社会をつなぐことです。すると、「人生としてのライフ」と「日常生活としてのライフ」に乖離がないことが望ましい状況といえるかもしれません。ただし、両者が完全に重なると、明確に将来の目標を立て、プランニングをし、日々それに向けて不断の努力を続けていく、そういうイメージが強く浮かび上がってきます。

私は、キャリア教育・キャリア形成支援というのは、不断の努力を強いるものではうまくいかないだろうと思っています。将来の夢や目標を持ち、そこに向かって進んでいくということは、その達成の如何よりも、現在の生活の充実や、現在に適応的になるということにこそ、大きな意味があるのではないでしょうか。

大学と教員の視点から見たキャリア教育 ―水平統合・機能的教育への転換―

龍谷大学　教学部長　経済学部　教授　河村能夫

現代の大学生は、二つの大きな問題を抱えています。一つは、目的意識を持たずに入学してくること。二つめは、偏差値によって自分の力を評価してしまっている、ということです。この解決が、我々に突きつけられた大きな仕事です。

そのためには、大学をかつてのエリート教育から、高度なバランスのある市民教育へと変えなければなりません。

具体的には、初期教育が一つの解決策になります。目標は、動機付けを明確にし、感性を豊かにし、想像力のある人間を作ることです。そのためには、いままでのような教育の仕方では不可能です。そこで出てくるのが、帰納的な教育、系統的な教育、そして少人数教育です。

従来の教育は、理論を教わってそこから現実を見る、という演繹法的なやり方です。そうではなく、現実を見て、物の考え方を抽象化・理論化すること。これが帰納法的なやり方です。そのためには、現実の中に学生を置いて、そこから物事を考えていくという教育の方法をシステム化する必要があります。その方法の一つが、キャリア教育ではないかと私は思います。

専門性を発揮させる従来の教育のあり方は、いわば垂直統合で積み重ねるものでした。悪く言えば、タコツボをたくさん作っていく、というやり方です。

ところが、物事を考えるときには、例えば公害という問題を考える場合には、自然科学的な考え方も重要であれば、ヒューマニティの考え方も重要であるし、また社会学的なアプローチも必要です。現実的な問題を考える場合には、いかに水平統合させるかということが重要になるわけです。

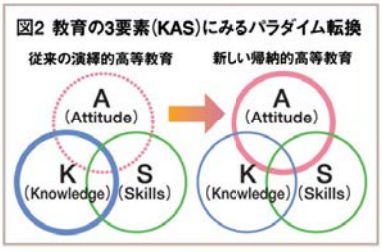
教育の3要素として、我々は昔からKASという考え方をしています（図1）。従来の大学教育には、知識Kと技能Sに対するノウハウの蓄積はあります。そして、現実の中に学生を入れることが態度Aにつながるわけですが、この方法論とシステムがまだできていないという状況です。

今までの大学教育による「Kを中心としてS」というあり方から、「Aを中心としてKとSを結集させる」というあり方へのパラダイム転換が求められています（図2）。例えば、インターンシップで現実を感じた上で、自分にはこういうKとSが必要だな、と学習の習得やカリキュラムの習得の仕方が変わってくる、ということを我々は理想的な教育として考えています。そのためにはやはり、Aをどう生かせるか、ということに焦点が当てられるだろうと思います。

こういったことを、アメリカの大学はうまくやります。地域と連携して、具体的な問題と直面する中で教育をし、同時に研究をやっていく。それがアメリカの強さを作っていると私は思います。我々はいま、それを作る過程にあるわけです。

図1
教育の3要素

図2 教育の3要素（KAS）にみるパラダイム転換



大学カリキュラムのなかのキャリア教育―能力論的検討―

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授
松下 佳代

現在、学歴の意味が大きく変化しています。労働政策研究・研修機構が就業機会に関する興味深い研究を行っていますが、それによると、正社員比率は大卒・大学院卒でようやく70%前後、そして高等教育中退者の就業状況の劣悪さが目立ちます。今や高等教育の学歴は、安定した仕事につくための十分条件ではない、ということです。また、大卒という学歴だけでは不十分で、大学教育の質が問われるようになったということでもあります。こうしたことが、出口の質保証として「学士力」という新たな能力概念が打ち出されてきたことの背景になっています。

このような状況は日本だけでなく、先進国に共通の傾向です。そこには、「新しい能力を身に付けさせることで、グローバル経済社会からの労働力要請に応え、また学校から職業への移行を容易にする」という共通の処方箋が見て取れます。そこから、キャリア教育への期待も生まれてくるわけですが、私は、現状のキャリア教育にはいくつかの問題点を感じています。

まず、個人の能力開発に焦点化されすぎている、ということです。U・ベックのいうように、現代は人生が個人化しているのは確かですが、だからこそ社会関係資本の構築が重要になってくるのではないかと思います。

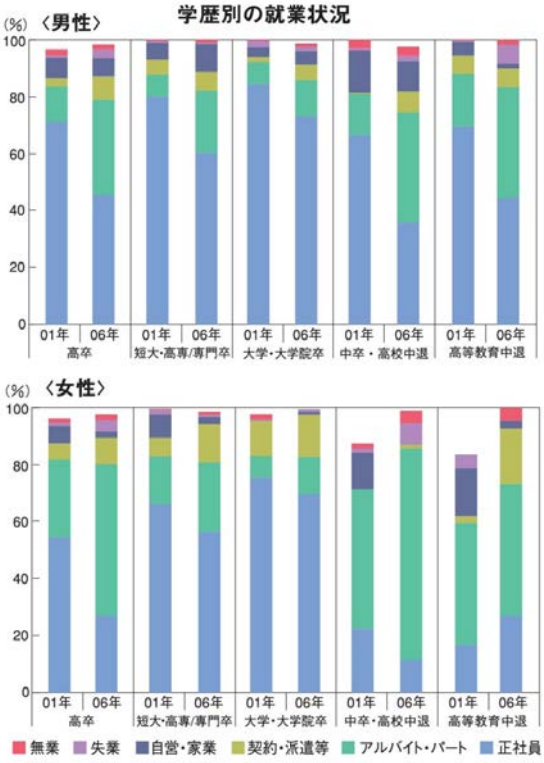
また、適応主義的な性格が非常に強い。現実にどう適応するかだけでなく、現実に即しつつそれをどう作り変えていくのか、という視点が必要なのではないでしょうか。

それから、学士力に代表されるように、大学生を集合として抽象的に捉えてしまっているのではないかと思います。大学生の多様性を踏まえる必要性を感じます。

ではどういうキャリア教育がありうるのか。OECDのDeSeCoプロジェクトが提唱するコンピテンシー概念は一つの参考になります。DeSeCo自体は義務教育修了段階を想定したものですが、異質な人々との関わりのなかで対立を扱う力なども組み込まれている点は、大学教育に重要な示唆を与えてくれます。

「大学生のキャリア意識調査2007」についていえば、ライフの二重性という概念に興味をひかれました。ただし、私は、「人生としてのライフ」のために「日常生活としてのライフ」を手段化しないことが重要だと思います。「日常生活としてのライフ」の充実が「人生としてのライフ」につながる、という見方が必要なのではないでしょうか。

そして、大学教育であるからには、能力の機能的側面と批判的側面の両方を見ておきたい。個人が変わることと、現在の社会を変えていくこと。現在の社会に適応していくことと、その社会を批判的に作り変えていくこと。その両面を見ていく、ということです。社会は歴史的に作られてきたものであり、だからこそ作り変えることができる、ということを学生が実感できる機会をもたせたいと思います。



［出典：『労働政策研究報告書』No.72, 2006年］

OECD「DeSeCo」のコンピテンシー概念

カテゴリー1 道具を相互作用的に用いる	A 言語、シンボル、テクストを相互作用的に用いる B 知識や情報を相互作用的に用いる C テクノロジーを相互作用的に用いる
カテゴリー2 異質な人々からなる集団で相互に関わりあう	A 他者とよい関係を築く B チームを組んで協同し、仕事する C 対立を調整し、解決する
カテゴリー3 自律的に行動する	A 大きな展望の中で行動する B 人生のプランや個人的な計画を設計し、実行する C 権利、利害、限界、ニーズを擁護し、主張する

大学生のキャリア意識―高等学校のキャリア教育が果たすべき役割―

広島県立祇園北高等学校 教諭
久保 玲士

私どもは中学校から毎年新入生を迎えるわけですが、ここ数年、彼らの精神年齢がじわじわと低くなっている気がしています。このままの状態で卒業させると、恐らく大学では、より多くの問題を抱えることになるのではないか、という危惧もあります。そこで私どもの高校では、キャリア教育を通じて、何とか今の高校生に欠けている様々な能力、例えば物の言い方、行動、考え方、価値観などに働きかけていく、ということをしています。

高等学校では大きく二つのスキームでキャリア教育を行っています。一つは、3年間続く総合的学習の時間、という科目。それから個別対応として、週2回、一日あたり6時間、キャリアカウンセラーを配置しています。

では、こうしたキャリア教育の成果はどうなのか。それを客観的に測定できる指標として、進路未定者の数の推移、高卒で就職をした卒業生の離職率の推移、大学進学者の中途退学率の推移、の3つを設定しました。

進路未定者については、一昨年度には10％が進路未定のまま卒業していきました。これが、昨年度には半減して5％になりました。一昨年から昨年にかけて、インターンシップのメニューを増やすなどした結果なのではないかと嬉しく感じています。

次に、昨年の本校卒業者の就職後の離職率は16・8％です。厚生労働省や文部科学省が把握している全国平均を下回る数字です。今後調査を続けてみて、この数字がより低下していくことを期待しています。

そして、平成19年度までの過去4年間で、本校の大学進学者の中退率は0.7％でした。本校の大学進学者は例年150～180人です。そのうちの0.7％ということで、正直ほっとした気持ちもあります。これは私どもの努力だけではなく、進学先の大学でも様々なケアをしていただいたおかげだろうと思います。

このように、私どもはキャリア教育に一定の成果を感じています。

広島県内の高等学校では、キャリア教育とはこういうものだ、という認識がある程度収斂されてきています。しかし、本日のフォーラムでお話を伺って感じたのは、大学においては、キャリア教育の認識が各大学間でばらばらの状態にある、ということでした。

また、大学でのキャリア教育と高等学校におけるキャリア教育の間にギャップがあることも感じました。大学でのキャリア教育にも様々な取組があるのだとは思いますが、それをもう少し声高に発信していただいて、お互いの関係をより近しいものにするべきなのではないかと思います。キャリア教育に関する高大連携のあり方にもう一歩踏み込んでお互いに考えていかなければ、高校でのキャリア教育は一体なんだったのか、ということにもなりかねないのでは、と感じています。

「大学生のキャリア意識調査2007」とは

「大学生研究フォーラム2008」パネルディスカッション第1部のテーマは「大学生のキャリア意識調査2007から示唆される現代大学生像」でした。

これは、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会が共同で行った「大学生のキャリア意識調査2007」の調査データをベースに、パネリストとして参加された先生方にそれぞれの立場から独自の解析を行っていただき、現代における大学生像を浮き彫りにしようと試みたものです。ここでは、パネルディスカッションのベースとなった調査の概要についてご紹介します。

本調査は、大学生のキャリア意識やキャリアデザイン、大学のキャリア教育やキャリア形成支援の全国的実態・動向の把握を目的に行われました。調査項目は右に示すように、時代、社会状況、学生観、その他を含む広い範囲にわたっています。

調査項目

1. **人生としてのライフ**:将来の見通し、大学院への進学、時間的展望、資格の必要性、就職活動の開始期、就労観、人生観、家族観
2. **大学入学以前の経験・考え方**:大学への進学理由、高校までの進路・キャリア指導、ボランティア・インターンシップへの参加経験、人生設計の開始期
3. **キャリア教育・キャリア形成支援の実態**:キャリアセンター、教員、上級生のキャリア支援状況、キャリア教育科目の受講経験、キャリア形成支援プログラムへの参加経験
4. **日常生活としてのライフ**:1週間の過ごし方、その成長や発展、人生設計への貢献、学生生活の満足、大学生活の重点、充実感、参加型授業への参加経験、両親の関与
5. **汎用的技能の獲得**:授業・授業外における汎用的技能の獲得
6. **心理学の尺度変数**:進路選択に対する自己効力、学習意欲

調査概要

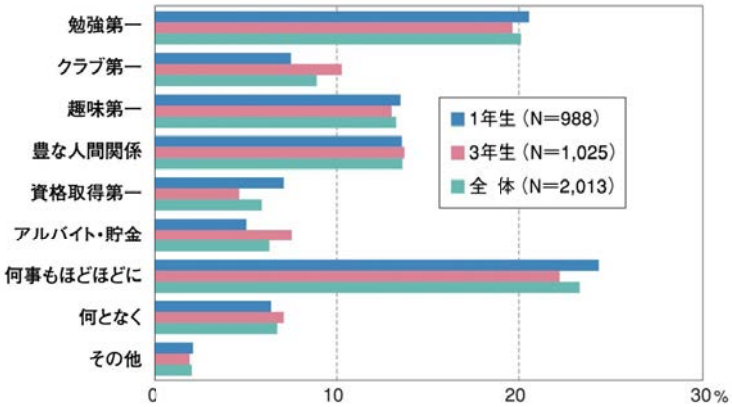
項　　目	内　　容
1.調査目的	大学1年生・3年生の大学生活実態ならびにキャリア形成活動・将来設計・就職意識を把握し、当財団の奨学事業の参考とする。
2.調査エリア	全国
3.調査対象	4年制大学、医系・薬系6年制大学に通う1年生・3年生
4.調査方法	インターネットリサーチ
5.調査対象抽出法	(株)電通リサーチ　MILLIO-NETモニターより無作為抽出
6.有効回収数	大学1年生　988人（男子:512　女子:476） 大学3年生 1025人（男子:563　女子:462）
7.実施時期	2007年11月8日～14日
8.調査実施機関	(株) 電通リサーチ
9.企画	(財) 電通育英会 所在地: 東京都中央区銀座7-4-17 電通銀座ビル
10.調査設計・アドバイザー	京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授 溝上慎一氏
11.解析・コメント執筆	福島大学 人間発達文化学類 准教授 中間玲子氏

なお、本調査は3年に一度のサイクルで継続的に実施する予定です。2007年はその第一弾であり、毎年8月に実施が予定されている「大学生研究フォーラム」と連動して研究を進める予定です。

一連の調査結果と、それをもとにした多様な視点・立場からの解釈や議論を総合して、少しでも学生の実態をふまえた実りある知見や示唆をキャリア教育、キャリア形成支援、ひいては大学教育改革の関係者と共有していきたいと願っています。

調査結果の紹介

「大学生のキャリア意識調査2007」から、いくつかの調査結果をご紹介します。
なお、調査票、調査結果の詳細は電通育英会ホームページをご覧ください。http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/

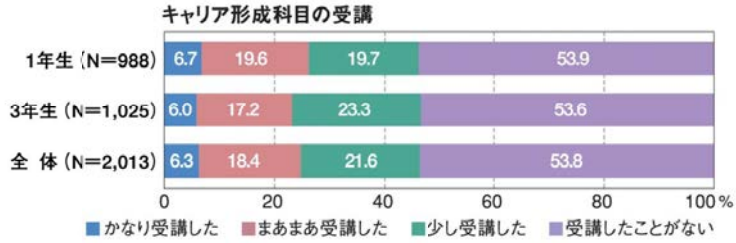


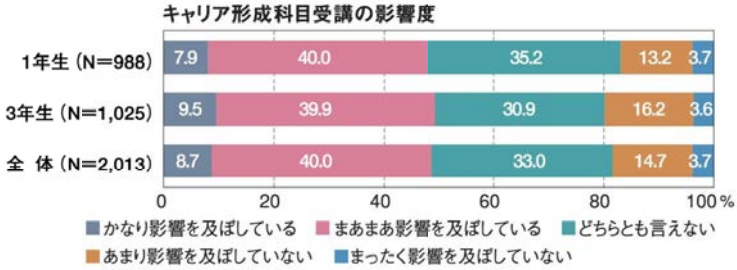
大学生活の重点

大学生活の重点を、8つの選択肢から1つだけ選ばせたところ、1年生、3年生ともにもっとも多く見られたのは「何事もほどほどに」（1年生24.3%、3年生22.2%）、次いで「勉強第一」（1年生20.5%、3年生19.6%）でした。

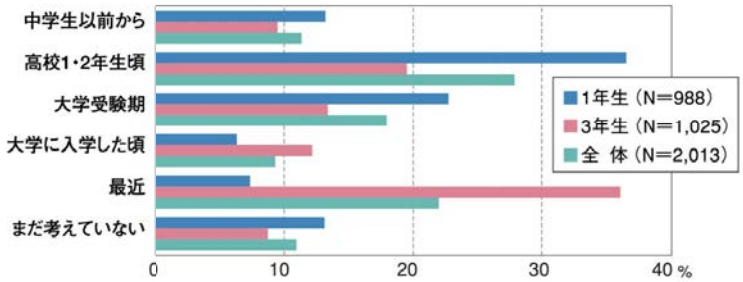
キャリア形成科目の受講

キャリア形成科目の受講経験は、1年生、3年生ともに、46%の学生が持っていました（1年生46.1%、3年生46.4%）。今の自分への影響度（＊「かなり」「まあまあ影響を及ぼしている」の合算）は、1年生47.9%、3年生49.4%で、ともに約半数の者が感じていました。





いつから将来の仕事や人生設計を考え始めたか



現在考える将来の仕事や人生設計をいつ頃から考え始めたかという問いに対しては、1年生で「高校1・2年生頃」（36.5%）、「大学受験期」（22.9%）の順で多く、3年生で「最近」（36.1%）、「高校1・2年生頃」（19.6%）の順で多く見られました。